事例４：中学校　通常の学級に在籍するＤさん（２年生）

初めての場面での対応や会話でのやり取りが苦手な生徒に対して、個別の教育支援計画を作成、活用して支援を行った事例です。コーディネーターが関係機関との連絡調整の仕方を工夫しながら支援会議を行い、個別の教育支援計画の作成、活用につなげました。

＜生徒の実態＞

○　中学２年生男子で、小学校高学年のときから医療機関を受診していますが、診断は受けていません。
○　穏やかな性格で、注意や指示に素直に従い真面目に活動します。
○　計算や漢字、英単語を覚えることが得意です。
○　理科の実験は好きですが、結果をまとめるのが苦手です。
○　教師や友達と話をしているときに、話の内容がずれることがあります。
○　文章読解が苦手で、テストでは思うような結果が残せず、悩んでいます。
○　運動会や文化祭の行事に参加するのに不安を感じています。

１．個別の教育支援計画作成までの経緯

校内支援体制①

☆　個別の指導計画を作成して、**校内で計画的・組織的**に支援を行っています。

○　学年部会での話合いを基に、校内委員会で個別の指導計画を作成し、教科担任間で連携を図り支援を行っています。
○　担任、学年主任、コーディネーターでの話合いをこまめに行い、支援方法や支援体制の確認や改善を行っています。
○　校内委員会は、運営委員会の場を使い、回数を増やして効率的に進めています。
○　支援内容の情報提供は、職員会や事例研修会の中で行い、教職員全体に周知を図るようにしています。

ポイント：校内委員会の設置には様々な方法があります。従来ある既存の校内組織に、校内委員会の機能を持たせて拡大したり、校内組織を整理・統合して校内委員会を設置したりするなど学校の実状に応じて工夫しましょう。

Ｄさんの保護者との連携①

☆　担任は、保護者と**日常的に情報交換**を行う中で、Ｄさんの関係者・関係機関がたくさんあることを知りました。

学校から

Ｄさんの頑張っていることやよい点を伝えた後、課題となる点について伝え、同時に現在行っている支援内容や成果についても伝えました。

現在、関わっている関係者・関係機関についての情報提供がありました。

保護者から

○　Ｄさんが療育機関や相談機関を利用していること、複数の習い事をしていることが分かり、コーディネーターに伝えました。
○　今後必要に応じてコーディネーターが話に加わることを保護者に伝え、了承を得ました。

校内支援体制②

☆　外部機関との連携等について、**教職員に理解・啓発**を促しました。

○　関係者・関係機関がそれぞれで支援を行っていることを知ったコーディネーターは、共通の目標を持ち、役割分担をしてＤさんの支援を行っていくことが、必要ではないかと考えました。そのためには、個別の教育支援計画を作成して連携することが重要だと思いました。

○　関係者・関係機関との連携や、個別の教育支援計画の作成を進めるために、まずは教職員への理解を図ることとしました。

○　夏休みを中心に校内研修会を行い、「個別の指導計画と個別の教育支援計画の違い」や「個別の教育支援計画の意義と活用の仕方」について教職員へ理解を図りました。

Ｄさんの保護者との連携②

☆　保護者に個別の教育支援計画の作成について**説明し、同意**を得ました。

○　小学校の頃から、保護者はＤさんの将来のことについて考えながら様々な取組を行っていたので、個別の教育支援計画作成の同意をすぐに得ることができました。

○　個別の指導計画を基に校内で支援を行っていたので、関係者・関係機関との連携の話を進めることはスムーズにできました。

２．個別の教育支援計画の作成

個別の教育支援計画（案）の作成

☆　本人と保護者の願い等を把握し、**関係者・関係機関を確認**した上で、　関係者・関係機関より情報収集を行いました。

☆　担任とコーディネーターは、保護者と話し合い、個別の教育支援計画（案）を作成し、校内委員会で、検討しました。

１　Ｄさんと保護者の願いと希望を把握しました。

Ｄさん

試験を頑張りたいです。

自信を持って、行動してほしいです。

保護者

２　コーディネーターは、保護者と個別の教育支援計画の作成に参画する関係者・関係機関について確認しました。

Ｄさんの場合は、医療機関、相談機関、療育機関、学習塾、ピアノ教室、理髪店でした。

３　担任とコーディネーターが各関係者・関係機関と直接連絡を取ったり、保護者に連絡を取ってもらい、保護者から話を聞いたりすることで情報収集をしました。

４　担任とコーディネーターが保護者と話し合い、個別の教育支援計画（案）を作成しました。

５　校内委員会で個別の教育支援計画（案）について検討し、支援会議に提案しました。

支援会議の開催

☆　支援会議開催に当たっては、関係者・関係機関が一堂に会するのは難しいため、**何回かに分けて行ったり、他機関へ出向いたり**しました。

☆　支援の状況を報告してもらい、個別の教育支援計画（案）を基に**個別の教育支援計画を作成**しました。

○　支援会議を開催するため、関係者・関係機関に連絡をしましたが、全員が集まれる日程が取れませんでした。そこで、集まれる範囲で支援会議を行い（①）、それ以外の人は次のような対応を取りました（②から④）。

①　支援会議には、学校関係者とピアノ教室の先生、理髪店、相談担当者、保護者が参加し、地域で生活をする上での目標や支援方法の共通理解をしました。

②　療育機関には、担任、保護者、コーディネーターが訪問し、話合いをしました。

③　主治医には、保護者が個別の教育支援計画（案）と個別の指導計画を持って行き、助言を受けたり医療機関としての役割を確認してもらったりしました。

④　学習塾の先生には、文書や電話により学習状況や支援の仕方を確認しました。

留意点：コーディネーターには、関係機関との連絡調整などの役割があり、多くの時間が必要になります。コーディネーターが、動きやすくなるためには他の校務分掌や部活動担当等の業務軽減が必要です。また、複数コーディネーターを配置しているところもあります。

支援会議の内容

☆　幼児期から現在までの**本人の成長や現在の課題、今後の進路に向けての課題**を確認しながら、話合いをしました。

○　長く関わっている相談担当者やピアノ教室の先生からＤさんの成長の様子を聞くことができました。

○　就労に向けて、ソーシャルスキルを高めることが大切であることが確認できました。療育機関で行ったことを学校生活で活かせるように共通理解をしました。

○　学校で問題や課題が出たときは、家庭や他の機関に伝え、随時相談をしながら支援に当たることを確認しました。

３．個別の教育支援計画の活用

個別の指導計画の見直し

☆　個別の教育支援計画を受けて、個別の指導計画の目標を見直し、引続き支援を継続しました。

○　個別の教育支援計画から、学校で行うこと、他の関係者で行うことについて話し合うことができ、どのように支援したらよいか、何を目標にしたらよいかということが明確になりました。そのことで、担任や教科担任の焦りや戸惑いがなくなりました。

○　関係機関と連携する中で、細かな支援についての意見交換ができ、学校での支援方法を改善することができました。

「関係者・関係機関との連携のポイント！」

関係者・関係機関とのネットワークを構築するためには、連絡を取り合い、お互いの施設や機関等を訪れ、幼児児童生徒の様子を見るなどし、情報交換をすることが大切です。そうすることで、お互いの持つ有効な支援方法や指導の手立てを共有することにつながります。